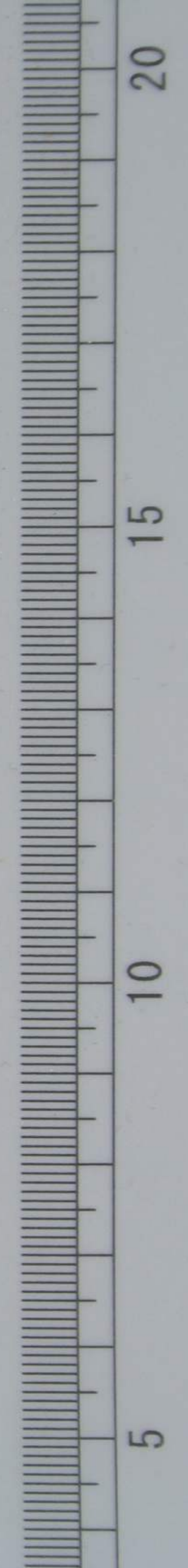
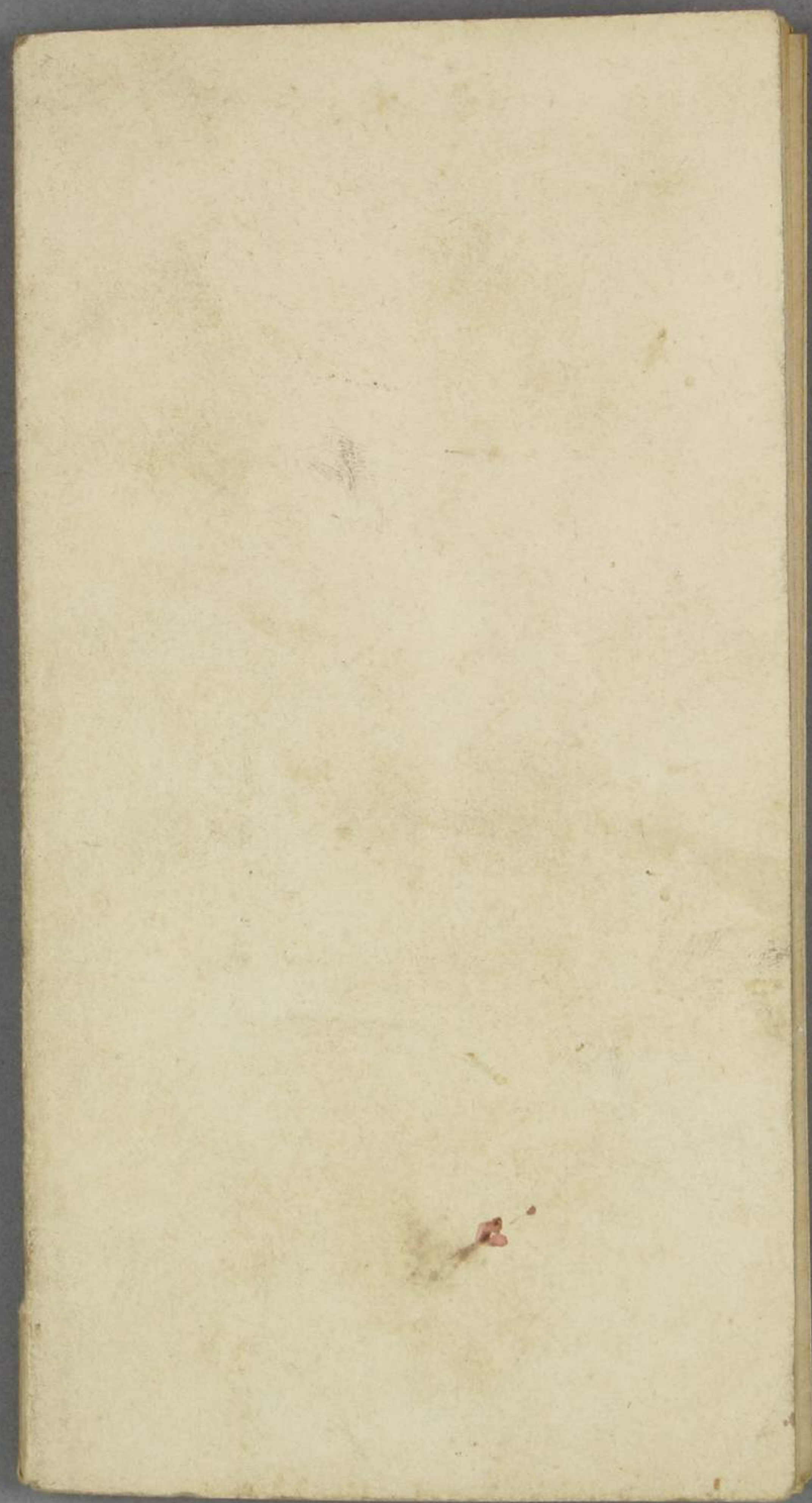
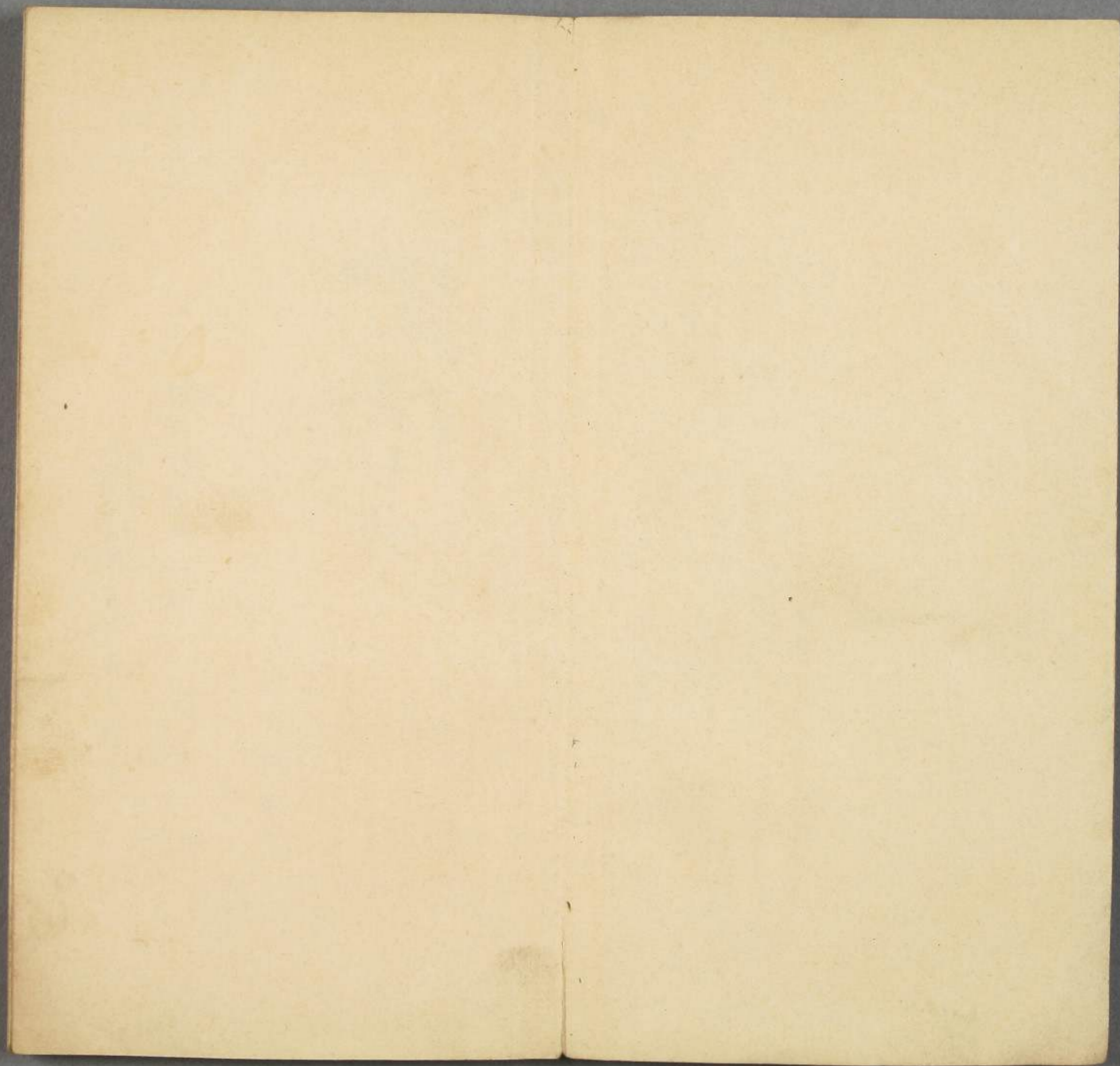


大和田建树作
 長根歌











長恨歌

大和田建樹作

一、漢の帝のその昔

美人を朝に召さんとして

あされど四方に得かねつゝ

月日あまたになりけり

二、時に揚氏の深窓に

まだ世ごもれる乙女あり

年は三五か十六夜の

月の顔ばせ物に似ず

三、隠すとすれど顯はれて

いつしか昇る雲の上

笑めばこぼるゝ愛嬌の

にほひあたりを拂ふらん」



四、風まだ寒き春の頃

御供つかへし華清池の

湯の氣にぬれて海棠の

しをれし風情ぞ美しき

五、是より受くる御覺え

さらでも短き春の夜を

御帳の内にさもらひて

鳥さく事も幾たびぞ

六、夜は明くれども君さめず

朝まつりごと怠りて

花見月見の御遊には

召させ給はぬ折ぞなき

七、美人三千後宮に

ありとはいへど三千の
寵を一身にかうむりて

あたりまばゆき其光

八、黄金のうてな玉の殿

それのみならで地を賜ひ

九、世にある人の父母は

榮花も今ぞ盛なる

男の子な生みそたをやめを

生みて家門を起せやと

いはぬ人なき世のさまよ

一〇、雲くもに聳そびゆる高殿たかどのの

物ものの音ねおろす春はるの風かぜ

共ともにうかるゝ歌舞うたまひの

内うちに此日このひも暮くれにけり



一一、忽たちまちおこる攻鼓せめづまか

地ちをふるはして響ひびさくる

聲こゑは嵐あらしかいかづちか

轟とろろき破やぶる舞まひの袖そで

一二、都みやこを掩おほふ馬うまけむり

西にしに東ひがしに馳せせ違ちがふ

巾を御幸の旗かげの

たゆたひ行くもあはれなり

三
落ち行き給ふ一百里

叫べど進む兵もなく

恨あまたのたをやめは

馬前の露と消え失せぬ

一四
翡翠のかんざし玉の櫛

亂れて物を思へども

君の御身も救ひえぬ

命のつらさが爲ぞ



一五 塵吹く風を身にしめて

山より外にたどり行く

其名も峨眉の麓道

夕日の旗の色寒し

一六 緑かはらぬ蜀の山

流れ久しき蜀の川

眺むるたびに草ならぬ

君が袂も露ぞおく

一七 別れし人の悲しきは

旅のおましの月の影

過ぎし昔の戀しきは

雨ふる夜半の鈴の聲

一八、 咲き散る花もあまた春

世は泰平に治まりて

都に歸る道のべに

今ぞ過ぎ行く馬嵬の野

一九、 思へばこゝよたをやめに

言もかはさで別れしは

過ぎんとすれど過ぎかねて

御供の袖もぬれにけり



二〇、 駒のあゆみに引かれつゝ

行くともなしに立ち歸る

都は元のまゝながら

又語るべき人ぞなき

三、見るに袂の露けきは

軒端の柳池の蓮

蓮の顔ばせ見ぬ世にも

柳の眉は猶こゝに

三、桃の花さく春風に

吹かる、夜半も慰まで

桐の葉おつる秋雨に

しをれて物ぞ思はるゝ

三、刈る人もなき庭の草

心のまゝに花咲きて

御橋を埋むもみぢ葉に

風のみ渡る夕まぐれ

二四、 ながらへ残る宮人の

頭に白き雪の色

舞の袂も今は又

昔に返すよしもなし

三五、 窓の螢もなきたまの

影かと思ふ心地して

寐られぬ夜半のともし火を

一人かゝぐる窓の内

三六、 時の鼓を数ふれば

まだ明くるには遠くして

空にかゞやく天の河

消えんともせぬ夜の長さ

二七 初霜さむき曉も

たれ我聞の友とせん

此世あの世と隔りて

夢にも人の歸りこず



二八 時に鴻都に名も高き

仙術えたる方士あり

あまりに深き御歎き

いでを慰めまつらんと

元、 救を奉じて尋ね行く

靈のゆくへは何方ぞ

天にのぼりつ地に入りつ

問へど知られず音もなし

三、 ふと聞きえたりわたの原

八重の汐路の道遠く

蓬が鳥と名に呼びし

仙女の住める山ありと

三、 五色の雲に包まるゝ

玉のうてなに住む人の

多き中にも玉真と

よべる乙女の住むときくし



三、かくて方士はほとくと

玉の扇を打ちたゝき

漢の天子の敕使ぞと

聲高らかに名乗りしに

三、九華の帳裡夢さめて

枕おしのけ立ち出づる

袖吹く風は今も猶

其夜忘れぬ舞すがた

三、傾く玉の冠より

こぼれてにほふ亂髪

淋しき顔にふりかゝる
涙は花の春雨か



三五
敕使たまひし喜を
申す詞も涙にて

君に別れし其日より
淋しく送る此月日
三六
かくまで長き春の日の
短かゝりしは昔にて
今は此世にたゞ一人
暮らしかねては音にぞ泣く

三七、 思おもひあまりて戀こひしさに

眺ながめやれども君きみが住すむ

都みやこの空そらは霧きりこめて

使つかひたのまん雁かりもなし

三六、 是これぞ形かた見みと身みにふれし

小せ櫛ぢかんざし取り出いで、

二ふたつに裂さきたる其その一ひとつ

方はう士じにこそは渡わたしけれ

三五、 裂さける小せ櫛ぢもかんざしも

かはらぬ誓ちかひの其そのしるし

かたき心こころな忘わすれそよ

逢あひ見みる事ことも是これまでぞ

四〇、 歸^{かへ}る方^{ほう}士^しを呼^よびとめて

さらにつたふる古^{いにしへ}の

星^{ほし}もあふ夜^よの誓^{ちかひごと}言^{こと}

知^しる人^{ひと}外^{ほか}になきぞとよ

四一、 天^{てん}に生^うれば願^{ねが}はくは

翼^{つばさ}かはさん鳥^{とり}となり

地^ちに生^おひ出^いでば願^{ねが}はくも

枝^{えだ}を連^{つら}ぬる木^きとならん

四二、 長^{なが}しといへど天^{あめ}地^{つち}も

遂^{つひ}に盡^つきせぬ事^{こと}あらじ

つきても盡^つきぬ玉^{たま}の緒^をの

長^{なが}き恨^{うらみ}をいかにせん



長恨歌

白樂天

漢皇重色思傾國
御宇多年求不得
楊家有女初長成
養在深閨人未識

天生麗質難自棄
一朝選在君王側
回眸一笑百媚生
六宮粉黛無顏色
春寒浴賜華清池
溫泉水滑洗凝脂
侍兒扶起嬌無力
始是新承恩澤時
雲鬢花顏金步搖
芙蓉帳暖度春宵
春宵苦短日高起
從此君王不早朝

承歡侍宴無閑暇

春從春遊夜專夜

後宮佳麗三千人

三千寵愛在一身

金屋妝成嬌侍夜

玉樓宴罷醉和春

姊妹弟兄皆列土

可憐光彩生門戶

遂令天下父母心

不重生男重生女

驪宮高處入青雲

仙樂風飄處々聞

緩歌慢舞凝絲竹

盡日君王看不足

漁陽鼙鼓動地來

驚破霓裳羽衣曲

九重城闕煙塵生

千乘萬騎西南行

翠華搖々行復止

西出都門百餘里

六軍不發無奈何

宛轉蛾眉馬前死

花鈿委地無人收

翠翹金雀玉搔頭

君王掩面救不得
回看血淚相和流
黃埃散漫風蕭索
雲棧縈紆登劍閣
峨嵋山下少人行
旌旗無光日色薄
蜀江水碧蜀山青
聖主朝朝暮暮情
行宮見月傷心色
夜雨聞鈴腸斷聲
天旋地轉迴龍馭
到此躊躇不能去

馬嵬坡下泥土中
不見玉顏空死處
君臣相顧盡霑衣
東望都門信馬歸
歸來池苑皆依舊
太液芙蓉未央柳
芙蓉如面柳如眉
對此如何不淚垂
春風桃李花開夜
秋雨梧桐葉落時
西宮南苑多秋草
落葉滿階紅不掃

梨園弟子白髮新
椒房阿監青娥老
夕殿螢飛思悄然
孤燈挑盡未成眠
遲々鐘鼓初長夜
耿耿星河欲曙天
鴛鴦瓦冷霜華重
翡翠衾寒誰與共
悠悠生死別經年
魂魄不曾來入夢
臨邛道士鴻都客
能以精誠致魂魄

爲感君王展轉思
遂教方士殷勤覓
排空馭氣奔如電
升天入地求之遍
上窮碧落下黃泉
兩處茫茫皆不見
忽聞海上有仙山
山在虛無縹緲間
樓閣玲瓏五雲起
其中綽約多仙子
中有一人字太真
雪膚花貌參差是

金闕西廂叩玉局
轉教小玉報双成
聞道漢家天子使
九華帳裏夢魂驚
攬衣推枕起徘徊
珠箔銀屏遞迤開
雲鬢半偏新睡覺
花冠不整下堂來
風吹仙袂飄々舉
猶似霓裳羽衣舞
玉容寂寞淚闌干
梨花一枝春帶雨

含情凝睇謝君王
一別音容兩渺茫
昭陽殿裏恩愛絕
蓬萊宮中日月長
回頭下望人寰處
不見長安見塵霧
唯將舊物表深情
鈿合金釵寄將去
釵留一股合一扇
釵劈黃金合分鈿
但教心似金鈿堅
天上人間會相見

錄 附



待宵迺舍

臨別殷勤重寄詞

詞中有誓兩心知

七月七日長生殿

夜半無人私語時

在天願作比翼鳥

在地願為連理枝

天長地久有時盡

此恨綿々無絕期





遅櫻

遅櫻見んとて高田の八幡に詣づ。鳥居の
あたりは春なほ半ばにて。梢毎に晴れた
る朝の雪の如し。隨身門の矢大臣。胡粉

半ば剥げたれども。未だ弓を離さず。昔
戀しき心地するに。鶯は神代のまゝの調
べにて。神樂殿のうしろの森にぞ歌ふ。

二

折しも足音高く來れる女の子三人。本包
と辨當とを同じやうに携へつゝ。海老茶

の袴を裾短かにはきたるは。學校がへり
なるべし。年の程何れも八つ九つ。見る
ともなしに櫻のあたりを。行きつ戻りつ
語り興ず。木蔭の落花は。庖の板敷に散
りたる鯛の鱗にも似たり。

三

早稻田の田道を行けば。蛙は前にもうし
ろにも鳴く。摘草する子も遠近に見えて。
むらぎえ残る雪のやうなる薺の花の間に
は。紫の莖も紅のれんげ草もまじれり。
蘆の若葉の一二寸のびたる蔭に群れ遊ぶ
目高。すくひても寒からぬ頃とぞなりぬ

る。

四

十三四の娘かなたより來りしが。細道つ
きて前に水あり。渡るには橋なく。飛ぶ
には少し遠し。困じて立てる折しも。人
の折り捨てたる櫻。流れんとして漂ひ居

るを見つかけつ。覺えず取らんとして身を
屈むるに。蝶のかんざし落ちて花の上
に
とまれり。

五

堤の若草折りしきて煙草くゆらしをる書
生あり。詩や作るらん。歌やよむらん。

おのれも其あたりに行きて見かへるに。
早稻田のあたり。青葉まじりの花多くし
て。げにも初櫻よりも珍らしきながめな
りき。昨日の土筆は杉菜となりて。羽織
ぬがしむる程の春風そよくと吹く。



ふと思ひ立ちて。東橋の停車場に至りしに。待合室いと静にて。腰掛の上に子供遊ばし居る小女と。藤島の藤の廣告なが

めをる老人とある外には。驛夫も見えず。巡查も見えず。時間表に問へば。發車までには一時間も待てよといふなり。されども二人來り三人來り。時もやうやう近づきたれば。切符もとめて乗る。十人の中に。堀切をさすもの七八に居るべ

し。笛なりて車うごき。風は植えならべ
たる早苗を渡りて。開きすてたるガラス
の窓よりそよくと吹く。涼しさ二つな
し。蓮ところぐくに心地よく笠を廣げて。
美人の顔まなぶらん花の頃思ひやらる。

二、

曳船とは呼べど。水浅うして筏も浮ばず。
白髭とは聞けど。秋ならねば百花園の面
影とほし。紡績所もて知られたる鐘が淵
など打ち過ぎて堀切にも着きぬ。見かへ
れば夕日は柳の中枝にあり。

三、

車に乗りて行くく聞けば。四つ木をば、
見もらし給ふなとぞいふ。さらば先にす
べしとて。浮草みどりなる川ぞひの道を。
八町ばかりも行けば。吉野園といふあり。
園はいつまで行きても花菖蒲にて。紫な
る燕は波を埋めて群がり飛び。白妙の鷺

は立つを忘れて打ちつれ憇ふ。花の間に
細道ありて。行く人歸る人。さながら廣
重の筆に入るべく。通辯つれたる外國人
さへ。寫真器械を提げて橋を渡り來れり。
園の廣さ。一萬坪に近しといふにて。花
の多さも知らるゝぞや。

車に乗りて行くく聞けば。四つ木をば、

四

堀切にては小高園といふに入る。小高き
岡の上。涼しき松の蔭。さては花美しく
咲きほひたる沼の真中などに。茶屋あ
また作りならべたるには。人のゐぬ處も
なく。白きひとへに赤のたすきしたる女

の童は。茶を運び酒をおくるに忙はしげ
なり。

こゝは打ちひらけたる見渡しにて。菖蒲
の花の咲きたらん限は。一目につくさる
る晴れやかさ。かの奥の知られぬ吉野園
とは。趣おのづから異なり。夕日は光を

斜にして。花の上に落ちたれば。もゆる
ばかりの濃紫あり。すきとほる如き薄紫
あり。赤きはいよく赤く。白きはます
ます白く。水にうつれる己がじゝの姿。
見とれて立てる乙女の影まで。知らず誰
が寫生帖にか收められたる。

女の童來りて蒼なる花をくれたるは。茶
のしろ拂ひたる禮ごゝろなるべし。暮れ
ぬ内にと手に取りて立てば。其長さ蝙蝠
傘の丈に劣らず。

五、

歸るさは鐘が淵より小蒸氣船に乗りて墨

大賣捌

●六合館●東京堂●東海堂●上田屋

田川を下る。川水ゆたかに岸を洗ひて。
 蘆吹く夕風。螢待ちがほなる夕暮なり。
 水神の森なほ霧に包まれずして。言問の
 渡守いまだ櫓を休めず。浅草寺の塔高く
 そびゆるあたりに。三つ二つ行く鳥の影
 のみ。秋のあはれをまださにぞ見せたる。

明治三十五年九月十三日印刷
 明治三十五年九月十七日發行

長恨歌

定價金拾八錢

著 者

大和田建樹
東京市牛込區東椀町二
 十番地

發 行 者

西村達夫
東京市日本橋區箔屋町
 十番地

印 刷 者

吉見繁藏
東京市京橋區西紺屋町
 二十六七番地

印 刷 所

株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町
 二十六七番地



發行所
 大賣捌

東京市日本橋區
 川瀬石町十二番地
 ●六合館 ●東京堂

東京出版社

●東海堂 ●上田屋

1133

金龍山人著

淺草公園

定價金十六錢

郵税金二錢

口繪寫真版挿畫十數葉製本美麗

御堂は十六間四面、本尊は一丈八分といふので名高い淺草觀音、其の境内即ち公園には色々面白いものが多い。その面白いものを一々書き記したのがこの『淺草公園』である。公園に遊んだ時はお土産にお買ひ下さい。公園を知らぬ人は之を讀んで公園通になつて下さい。

發行所 東京市日本橋區 東京出版社
川瀬石町十二番地

大賣捌 ●六合館 ●東京堂 ●東海堂 ●上田屋

